

# いいおじいさんの話

小川未明

青空文庫



うつくつばさ美しい翼がある天使が、まず貧しげな家の前に立って、心配そう  
 な顔つきをして、しきりと内のようすを知ろうとしていました。  
 そと外には寒い風が吹いています。星がきらきらと枯れた林のいた  
 だきに輝いて、あたりは一面に真っ白に霜が降りていました。天  
 使は見るもいたいたしげに、素靴で霜柱を踏んでいたの  
 あります。

てんし自分の身の寒いことなどは忘れて、ただこの貧しげな家  
 のようすがどんなであろうということを知りたいと思っ  
 ふうに見えました。家の内にはうす暗い燈火がついて、しんとし  
 ていました。まだ眠る時分でもないのに話し声もしなければ、笑

い声ごえもしなかつたのであります。

このとき、ちようど同じ村おなむらに住すんでいる、人ひとのいいおじいさんが、山やまの小舎こやでおそくなるまで働はたらいて、そこを通とおりかかつたのであります。そして、おじいさんは天使てんしを見ると、そばへいってどうしたのかと問とうたのであります。

天使てんしはおじいさんを見上みあげて、

「近ちかいうちに、この家いえへ天てんから子供こどもを一人ひとりよこそうと思おもうのですが、心配しんぱいでなりません。この寒さむいのに、子供こどもがどうしてつらいめをしないものでもないと思おもうと、なんとなく案あんじられて、私わたしはこの家いえのようすを見みにやってきましたのであります。それだのにこの家いえはしんとして、笑わらい声ごえひとつしないので、どうしたのであろう

と考かんがえていたのであります。「といいました。

おじいさんは天使てんしのいうことを聞きいて、もつともだといわぬばかりにうなずきました。

「それにちがいありません。俺わしがよく亭主ていしゅの心持こころもちを聞きいてみます……。」「と、おじいさんは申もうしました。

天使てんしは木枯こがらしの吹ふく中なかを、いずこへとなく歩あるいて去さりました。その後あとを見送みおくつて、おじいさんは、よくこのときの神かみさまのお心こころ持もちがわかつたのでした。

「ほんとうにこの家いえの亭主ていしゅにも困こまつたものだ。女房にようぼうがもうじきお産さんをするというに、働はたらいた金かねはみんな酒さけを飲のんでしまふ……。なんとということだ。今夜こんやもあの居酒屋いざかやに酔よいつぶれているに

ちがいない……。」「と、おじいさんは村はずれの居酒屋をさして、  
疲れて<sup>つか</sup>いる足を運びました。

いってみると、はたして亭主<sup>ていしゅ</sup>は、そこで酔<sup>よ</sup>っているのです。  
おじいさんは意見<sup>いけん</sup>をしてやろうと思<sup>おも</sup>いましたが、このようすでは  
なにをいっても、いまはこの男<sup>おとこ</sup>の耳<sup>みみ</sup>にはいらな<sup>おも</sup>いと思<sup>おも</sup>いましたの  
で、明日<sup>あす</sup>酔<sup>よ</sup>いのさめているときにするつもりで、家<sup>いえ</sup>にもどつたの  
であります。

その亭主<sup>ていしゅ</sup>は大工<sup>だいこく</sup>でありました。あくる日<sup>ひ</sup>、仕事場<sup>しごとば</sup>で彼<sup>かれ</sup>は休<sup>やす</sup>み  
の時間<sup>じかん</sup>に火<sup>ひ</sup>を焚<sup>た</sup>いてあたっていました。

いい天気<sup>てんき</sup>でありました。冬<sup>ふゆ</sup>ではあつたが日<sup>ひ</sup>があたたかに当<sup>あ</sup>たる  
と、小鳥<sup>ことり</sup>が枯<sup>か</sup>れた木立<sup>こだち</sup>にきて鳴<sup>な</sup>いています。青<sup>あお</sup>い煙<sup>けむり</sup>は、さびしく

なつた圃はたけの上をはつて、林はやしの中へとただよつてゆきました。彼かれは  
 ぼんやりと、なにか頭あたまの中なかで考かんえているらしく見みえたのでありま  
 す。

「こんにちは。」といつて、おじいさんは若わかもの者のそばへ近ちかづき  
 ました。

若わかもの者はだれかと思おもつて見みると、人ひとのよいおじいさんなもので  
 すから、

「こんにちは、いいお天てん気きですの、風かぜが寒さむいから火ひにおあんな  
 さい。」といいました。

それから二人ふたりは、いろいはなしろな話をしました、そのうちにおじ  
 いさんは、

「おまえさんのところにも、もうじき赤ん坊が産まれるようだが、もし子供がいらぬなら、ほしいという人があるから、やる気はないか？」といいました。

これを聞くと、若者は急に怒りだしました。

「大事な子供をなんで他人にやれるものか。おじいさんいくら人がよくても、また頼まれたからといって、そんなばかなことをいうものじゃない。」といったのであります。

おじいさんは、にこにここと笑って、

「それは俺が悪かった。おまえさんは酒ばかり飲んで、女房の身の上も思わなければ、赤ん坊が産まれる仕度もしてないよ。うすなので、おまえさんは子供がかわいくないのだろうと思つた

からいったのだ。赤ん坊は、この寒い時分に生まれてくるのだから、それを思つたら、あたたかに仕度しておいてやらなければならん……。そうでないかな。」と、おじいさんはいいました。

若者は、酒に酔つていけませんから、よくおじいさんのいうことがわかりました。自分が悪かつたと思ひました。若者は頭をかきながら、

「私がわるかつた。ほんとうに、まだ子供のことを考えていなかつた。女房が、わがままですこし氣にいらなことがあると、がみがみいうもんだから、つい外で飲んでしまうのだが、考えてみりや子供のために我慢するんだつた……。。」と、若者は心から感じたのであります。

おじいさんは、たいそう喜びました。その後のこと、夜、この  
 大工の家の前を通りますと、大工は家において、女房の話し声  
 もすれば、なんとなく陽気でありました。

「これなら、もう、安心だ。」と、おじいさんは、思いました。  
 ある夜の、星の光は、凍ったように白く見えたけれど、も  
 う、やがて春がきかかっているのがわかりました。おじいさんは、  
 山で仕事をして、おそく帰ってきましたと、いつかの天使が、大工  
 の家の窓の下に、しよんぼりと立っていました。いつかのように  
 素跣で、脊に白い翼がありました。

おじいさんは、神さまというものは、一人の子供をこの世の中  
 に送るために、これほど気遣われるものかということをはじめて

知りました。

「この家の亭主は、もうあのときから、酒をやめて、子供の生まれる仕度をしていきます。あのよう二人が、楽しそうに話をしている声がきこえています。もう、ご心配なさることはありません。」と、おじいさんは、いいました。

やさしい、美しい天使は、それでも、まだなんとなく安心しない気持ちをして、涙に光った目を、いたいたしげな自分の足もとに落としていました。

「俺は、はじめで、あなたのお姿を見たのでありますが、どの人も、この世の中に生まれてくる時分には、こうして、神さまがご心配なさるものでございませうか。」と、おじいさんは、天

使んしに向むかかって聞ききました。

天使てんしは、この長ながい年とし月つきを、生せい活かつと戦たたかつてきて、いまこのよ  
うに疲つかれて見みえるおじいさんの清きよらかな目めをうつしながら、

「どの人ひとが生うまれてくるときも、健すこやかに、平へい和わに育そだつようと  
思おもつて、心しん配ぱいするかしれません。そして、親おやたちは、みんな子こ  
供どもを大だい事じにしなげなければならないと思おもいますのに、いつか自分じぶんたち  
のこことにかまけて、忘わすれてしまいます。生うまれなまえ前まへまでは神かみの  
力ちからで、どうにもすることができけれど、ひとたび、世よの中なかのもの  
のとなつてしまえば、神かみの力ちからのとどくはずはありません。人にん間げん  
にすべてを悟さとる力ちからを神かみは与あたえたはずですから、それを忘わすれてし  
まえばまた、どうすることもできないのです……。」と、天てん使しは

こた  
答えました。

おじいさんは、天使てんしの話はなしを聞きいているうちに、遠とおい過か去この、青せいしゆん  
春はるの時代じだいに、自分じぶんの魂たましいが帰かえつたように感かんじました。あの時じぶん分ぶん  
から、自分じぶんは正ただしく生いきようと心こころがけてきたが、顧かえりみればまだど  
れほど後こう悔かいされることおほの多おほかつたことわかかしのない。若わかいものは、  
これから、一しやう生しやうをもつたいなく思おもつて、ほんとうに有ゆう益えきに、正ただ  
しく送おくらなければならぬらう……と思おもいました。

「よく、あなたのおつしやることがわかりました。よく、この家いえ  
の女にやう房ぼうにも、子こ供どもをしからぬように、注ちゆう意ういしますし、み  
んなが、いせい生いかつ活かつをするように、私わたしの力ちからで、でこころきるかぎり心こころが  
けさせます。」と、おじいさんは誓ちかいました。

いつしか、白い天使の姿は、どこへか消えてしまいました。

幾何もなくして、この家に、赤ん坊が生まれました。それか

らというものの、女房は、ほんとうにやさしい、いいお母さん

となり、亭主はよく働く大工となつて、二人は、赤ん坊の顔を

見るのが、なによりの楽しい、なぐさめとなつたのであります。

おじいさんは、仕事の帰りに、この家へ立ち寄つて、平和な有

り様を見るのが、またなによりの喜びでありました。

そして、何人によらず、子供をしかるのを見ると、おじいさ

んは、

「おまえが生んだから、自分のものだとばかり思つてはいけない。神さまこそ、ほんとうのこの子供のお母さんだから、自分の機嫌

にまかせて、子供こどもを育てそだててはならない。」といいました。

村むらの人ひとたちは、いまごろ、神かみさまなどというおじいさんをばかにして、笑わらっていました。

「おじいさん、神かみさまの子供こどもなら、人にんげん間は、神かみさまでなければならぬじゃないか、それだのにいい人ひともあれば、わるい人ひともある。これは、どうしたことだ？」と問といました。

そのとき、おじいさんは、いつか天てん使しが、

「人にんげん間は生うまれてくるとき、すべてさとちからさずの悟さとる力ちからを授さづけられてきたのだが、いつか忘わすれてしまつて、正ただしい生せい活かつができなくなつたのだ……。」といつたことを思おもい出だしました。

おじいさんは、そんなことをこの人ひとたちについても信しんじてくれ

ないと思ひました。まして、自分が、翼のある天使を見たなどといつても、大工の夫婦はじめ、それをほんとうにしてはくれないと思ひました。

そう思うと、おじいさんは、さすがに悲しかったのであります。おじいさんは、どうかもう一度、天使を見たいと思ひました。そうしたら、今度こそよく見ておこう……。そして、ほかの人にもしつと知らしてやろうと思ひました。けれど、ふたたび、天使を見ることはできませんでした。

そのうちに、春になりました。長い冬の間じつとしていた草木は、よみがえって、空は緑色に、あたたかな風が吹きました。おじいさんは、空に向かつて、黙つて感謝しました。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 5」講談社

1977（昭和52）年3月10日第1刷発行

※表題は底本では、「いいおじいさんの話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：雪森

2013年4月10日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

# いいおじいさんの話

小川未明

2020年 7月13日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>